

<随想>能研の表章先生

竹本, 幹夫 / タケモト, ミキオ

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

57

(開始ページ / Start Page)

117

(終了ページ / End Page)

119

(発行年 / Year)

1998-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020001>

能研の表章先生

竹本 幹夫

能楽研究所を誰も「能研」と略称するが、かつて表章先生は能研と呼ばれることになり抵抗を感じておられたようである。ところが皆が能研で通すので、ご自身ではおそらく不本意ながら、能研と称されるようになってしまった。こういう細かいことには、あまりこだわらない先生なのである。その能研で「先生」と言えば、表先生をさす。全員が弟子ばかりなのでそう呼びするわけでもないらしく、

私が初めて研究所に伺った頃から、先生といえば表先生のことなのである。先生はそれほどに、能楽研究所と共に歩んでこられたわけである。

昭和二十七年、野上豊一郎博士の旧蔵本の寄贈を受けるところから出発した能楽研究所は、表先生ご一代の間にそれに十倍する集書を成し遂げ、今や日本一（ということは世界一）の能楽関係文書の文庫にまで成長した。能楽研究所には、研究所本来の蔵書である野上本やその他の買入本もさることながら、鴻山文庫・般若窟文庫・観世新九郎家文庫といった特殊文庫が、質量共に他の比肩を許さぬコレクションとしてあるが、いずれも先生のご尽力により法政大学に寄贈されたものである。これら大文庫を形成される傍ら、三十代のはじめ頃からすでに能楽の学界をリードされ、岩波大系本『謡曲集』『金春古伝書集成』『鴻山文庫本の研究』を初めとする多数の共編著をものされた。特に世阿弥の能楽論に関しては、岩波文庫本『申楽談儀』以来、大系本・小学館日本古典文学全集・思想大系本『世阿弥・禅竹』と、ほぼ表注によって研究史をたどることが可能なほどで、能楽論関係の主要テキストの多くが、表先生の校訂によって提供されているのが実情である。個々

の研究論文には『能楽史新考』一・二の他、研究所紀要の『能楽研究』創刊以後、毎号に長大な論考を發表され、「多武峰の猿楽」「大和猿楽の『長』の性格の変遷」や、世阿弥および世阿弥伝書の用字法研究、喜多七大夫の研究、車屋謡本の研究と、次々に新境地を開拓された。少なくともこの四十年間は、表章の時代だったのである。

こういう先生に師事するというのは、弟子として甚だ氣骨が折れるかに見えるが、本当のところはこれほどお仕えしやさい先生は他にいない。私の場合、もう二十年以上もご指導賜りながら、先生の子飼いの弟子というわけではなく、言うなれば外様の立場でそれだけ楽なのではあるが、現に自身の教師としての立場をも顧みるに、私を師匠にするよりは、表先生に師事する方がずっと楽しくしかもためになると、残念ながら思うのである。

先生は俊敏にして嚴格、近寄り難い印象を名前を見ただけで人に与え、今でも先生が研究所の扉を開かれた途端、室内の空気は一変して緊張の度が急激に高まるのであるが、実はそれほど恐ろしい方ではない。研究に関する話以外には、無駄なことには一切興味を示されず、会話の途中であらぬ世間話を差

し挟むと先生からのご返事がそれきり途切れ、気が付くともう先生は机に向かわれて仕事をされていゝる、などということはザラであるが、それは無駄話をしかける方が不遜なのであつて、研究にかかわることであればどのようなことでも、いかにご自身が多忙であられても、即座に対応してくださるやさしさがある。

しかも驚くべきことには、先生がかつて發表されたどのような小論であろうとも、それについて質問申し上げると、即座に明快なお答えが返ってくる。十年前の論文を忘れるのが一般の世間にあつて、世阿弥の言う「初心不可忘」を體現した研究態度ではあるまいか。資料調査に対してもこの姿勢は一貫している。最近私は鴻山文庫目録の先生の原稿校正を拝見して認識した。先生は資料の隅々まで熟読され、そのカン所をつかまえるのである。これはあたり前のことながら、あたり前のことをその通りなさるのが先生の恐ろしいところで、自分でやってみると、資料の熟読というのは非常な努力を要することなのである。

さらに、先生は何でも召し上がるのである。大体は朝遅くにご出勤であるが、そのままワープロに向

かわれ、書庫で調べものをされる以外は、我々が退出した後、夜遅くまで執筆を続けられるのが日常である。したがって食事も決まった時間になさるわけではなく、昼は学内で適宜に召し上がり、夜もどうしても外食せざるをえなくなるが、飯田橋のデニースの常連だったりして我々を驚かせる。その他タバコをまるで呼吸の一部であるかのごとくに愛飲され、しかも誰よりもご丈夫で風邪以外の病気はほとんどなさったことがない。長時間の勉強に捲まれて眠くなるということもないようである。

ある日研究所で、先生「竹本君、君が演博の能楽文書目録で、鴻山文庫の森嘉内伝書と呼んでいる本だがね、あれは嘉内のものじゃないよ」。私「どうしてですか」。先生「第何冊目のこれこれの所に、嘉内の死後に活躍した人物の名前が出てくるからね」。私「……」。ある晩私の家の電話が鳴る。先生「竹本君、守清本『謡抄』（古活字本。十冊百二曲の謡注釈書）だがね、君は鴻山文庫の守清本は演博本とは別版で、異植本と言っておるが、鴻山文庫とは別版、演博本とは同版と君が言う能研本の小塩の第三丁表に、きわめて特殊な文字が一つある。演博本ではどうか」。私「明日調べてお知らせします」。翌日は報告

する暇がなく、夜帰宅後に研究所に電話してみると、先生が電話口に出られる。私「演博本も同じです」。先生「竹本君、鴻山文庫本はそれが直つていてね、大半の丁が古活字じゃなくて、かぶせ彫りじゃないかな。版面が異植版にしては能研本に似過ぎているし、綺麗すぎる」。私はその場で絶句する。

先生は能楽研究所に四十七年にわたって勤務されたが、いまだに老いを感じさせないご精励ぶりである。今後も私どもは、先生にはかないそうにない。どうかいつまでも私ども後進をお導き下さればと思えばかりである。

(たけもと みきお・早稲田大学教授)